

引用文献

横田貴之 2006. 『中東諸国におけるイスラームと民主主義—ハマス 2006 年立法評議会選挙綱領を中心に』 日本国際問題研究所.

Levitt, M. 2006. *Hamas: Politics, Charity, and Terrorism in the Service of Jihad*. New Heaven & London: Yale University Press.

(横田 貴之 日本国際問題研究所)

Liyakat N. Takim. 2006. *The Heirs of the Prophet: Charisma and Religious Authority in Shi'ite Islam*. Albany: State University of New York. 252pp.

1979 年、テヘランに降り立ったエール・フランスの特別機のタラップから、1 人の老人が手を振る映像が全世界に伝えられた。その老人こそ、イラン・イスラーム革命の指導者である、ホメイニー師である。同革命は宗教知識人の見解が、現代社会の根底を揺さぶるものであることが示された歴史事件であった。しかし同時にそれは、歴史事件でありながら、現在のイラン社会に直接的に通じる。革命後のイランでは、法学者が政治権力ブロックの中枢に位置した、「特異な」体制が展開されている。評者は歴史的に、また現代的に 12 イマーム・シーア派（以下 12 イマーム派と略）における、権力体系を研究対象としている。

本書は、イスラーム史初期における、宗教権威をめぐる角逐のなかで主張された諸集団の「正統性」に焦点をあてる。イスラームにおける宗教的権力体系に関する実証的な史料分析の一方で、ウェーバーのカリスマ的支配論を分析枠組みに据え、社会学的な分析が試みられる。特に 12 イマーム派の権力体系が中心に据えられて議論は展開されていく。

著者によれば、カリフ、ウラマー、スーフィー、イマームとその「近臣者」が、異なる文脈で預言者ムハンマドの宗教的役割を継承したという。また、政治的権威者であったカリフは、同時に宗教的権威であったとされる。著者の視点は、カリフがイマームと同様に、宗教・政治的権威者であるという、クローン (Patricia Crone) たちの見解を引き継いでいる [Crone and Hinds 1986]。著者はクローンたちの見解を補完すべく、ハディースや年代記の記述からの論証を試みる。すなわち、第 1 にスンナ派初期ハディース集『ムワッタア (al-Muwatta')』にウマイヤ朝やアッバース朝カリフの先例のない言行の集録。第 2 に年代記の記述から、カリフによる法の解釈権の主張。著者はそれらから宗教権威者としてのカリフ像を描いている。このようなカリフの宗教的役割に対し、ウラマー、特にシャリーアに従事する宗教知識人は、預言者のハディースの保管者、さらには法解釈の権限を主張することで、カリフの宗教的役割に対抗したという。結局イスラーム社会の一般大衆が社会的規範をシャリーアに求めたために、宗教知識人の法的権威性の主張が社会的な承認を受け、統治者との関係において宗教的地位を確立したとする。

このような預言者の法学的遺産を自らの正統性の中心軸に据えるウラマーに対し、スーフィーはイスラーム社会における預言者の精神的な役割によって、自らの後継者としての正統性を主張する。スーフィーたちはムハンマドとの精神的・血統上の系譜、預言者の行った精神的体験の再現者とし

ての役割を正統性の根拠としたとされる。スーフィズムにしばしば付随するイスラームの「聖者」概念とは、著者によれば神と人間の調停者として顕現する精神的体験の再現者という役割に対する、社会的承認の証であるという。また「聖者」の現世利益は、彼らの権威の永続化に作用したのだと言う。一方、著者はイマームたちの宗教的役割には、スーフィーのような精神的役割も含まれていると考える。彼らの精神的な権威性は、オットー（Rudolf Otto）言うところの「聖なるもの」にアクセスする権能、また預言者から継承されたカリスマ性によって裏付けられたとされる〔オットー 2005: 15-9, 111-23〕。

スーフィーとイマームに関する宗教的役割の起源の違いが示され、預言者の継承者をめぐる議論は、イマームに焦点を当て、展開されていくことになる。シャリーアに対する法的権威と精神的権威という、包括的なイマームの宗教的権威性が明らかにされると同時に、分析枠組みとされるウェーバーのカリスマ的支配論〔ウェーバー 1954〕が問題とされる。カリスマ的支配の体系では想定されていない、並列するカリスマ的権力の問題である。著者のシーア派の歴史的展開に関する考察では、イマームの権力と、本書でリジャー（rijāl）と示される彼らの「近臣者」の権力が並存していたとされる。その「近臣者」の権力は、時にイマームの権力に対する補完的な役割を果たし、時に対抗し、時に凌駕する場合もあったとされる。しかし「近臣者」の権力の前提が、イマームによって委託されたものにすぎなかったため、「近臣者」の権力が単独で存在することはできなかったとされる。このような近臣者の権力が、教義体系の合理化、シーア派内の他の信条に対する峻別化、またカリスマ的権力の日常化の一端を担ったとされる。

さらに 10～11 世紀には、人名辞典が作成される。それは、イマームの言行録の伝承者に対する、人物評価を記した書である。またその記述が後代の人名辞典にも影響を与えている。評者が目にした 18 世紀に作成された『学ある者の楽園と徳ある者の聖地（*Riyāḍ al-ʿUlamāʾ wa Ḥiyāḍ al-Fuḍalāʾ*）』という人名辞典においても、しばしば 11 世紀に作成された人名辞典の記述が引用され、伝統的な知的資料とされているといえる。著者は、そのような人名辞典がイマームの権力の証明やシーア派の歴史的展開の証明手段のみならず、その歴史的展開において「近臣者」を教義体系内に構造化することで、権力の委託者に対する権威性を確証したと考える。権力の委託の問題は、イスラーム世界に独立した 12 イマーム派の共同体が出現するために、欠かすことのできない問題と考えられている。つまり独自のハディース集、独自の法学体系を形成するために、権力の委託が必要とされるというのである。

このような著者の議論は、2つの問題を含んでいる。第 1 に、カリフの宗教権威性の問題である。筆者やクローンの議論では、カリフもシーア派のイマームのような宗教権威であるとされる。しかしそれは、カリフたちが自らの正統性の対抗者、畢竟シーア諸派から護持するための、政治的文脈での「宗教」権威である。またカリフの先例のない行為がハディースに集録されていることが、カリフの宗教的権威性の証拠であるというが、それはカリフとしてではなく個人としての彼らの敬謙さに由来していると考えるのが妥当であろう。

第 2 に、本書の分析が 12 イマーム派に過度に傾倒していることである。現代的に言えば、シーア派とは 12 イマーム派のことであり、イランやイラクの情勢から、12 イマーム派における権力体系が重要となる。また 12 イマーム派内の権力体系が歴史的な構築物であり、故に歴史的な展開を研究対象と考えることは、今日的に生きる我々の関心を捕らえ、離さない。しかし 12 イマーム派を中心に据えるということで、他のシーア諸派を捨象しているともいえる。12 イマーム派の権力体系の展開は、その内部のみによって構築されえるものではなく、他のシーア諸派、あるいはス

ティワート (Devin J. Stewart) の指摘しているようにスンナ派との相互関係の中で構築されるものである [Stewart 1998]。それは同時に議論がウェーバーのカリスマ的支配論の俎上に載せて展開されていることに関する問題でもある。評者は 7～8 世紀のシーア派内の混迷が予定調和で語れないダイナミズムをもっており、そこに 12 イマーム派がもつ一つの面白みがあったと考えている。

そのことは逆に、著者が 12 イマーム派に傾斜することで、評者の予期しなかった、同派内部の権力構造の展開という面白さを描き出したといえる。著者は従来の研究では、イマームの弟子、あるいは言行の伝承者と考えられていたリジャールを、「近臣者」と考えることで、新たな同派内の権力体系を示そうとした。その意味で本書は、イマーム存在時の歴史的な権力構造を明らかにすることで、後代の同派における法学者による権力構築過程を説明する新たな解釈を生み出したともいえる。

このような歴史的な権力構造が明らかにされることは、歴史を越え、現代の 12 イマーム派における権力構造に十分に関わる問題として提起している。現在の同派では、数十名の法学者がマルジュウ・アッ=タクリード (marjī' al-taqlīd) と呼ばれる法学権威である。法学権威は、信徒にとって、イスラーム法の権威として、信仰生活の行動様式の模範となる存在である。またイラン革命で示されたように、時に革命に至るほどの包括的な権力を有する存在となる。何故彼らがそれほどまでの権力を有するようになったのか、あらためて本書はその問いを生々しくも、率直につきたててくる。

参考文献

- ウェーバー, M. 1954 『権力と支配』 (濱島朗訳) みすず書房.
——— 1962 『支配の社会学Ⅱ』 (世良晃志郎訳) 創文社.
オットー, R. 2005 『聖なるもの: 神的なものの観念における非合理的なもの、および合理的なもの
とそれとの関係について』 (華園聡磨訳) 創元社.
Crone, P. and M. Hinds. 1986. *God's Caliph: Religious Authority in the First Centuries of Islam*. Cambridge
& New York: Cambridge University Press.
Stewart, D. J. 1998. *Islamic Legal Orthodoxy: Twelver Shi'ite Responses to the Sunni Legal System*. Salt
Lake City: University of Utah Press.

(黒田 賢治 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

al-Sayyid Yūsuf . 1999. *Jamāl al-Dīn al-Afghānī wa al-Thawra al-Shāmīla*. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣrīya al-ʿĀmma li-l-Kitāb. 255pp.

ジャマールッディーン・アフガーニー (Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1838/39-97) は、今日のイスラーム世界におけるイスラーム復興運動の思想的な原点に位置づけられている。彼は、19 世紀後半のイスラーム世界で、西洋列強による帝国主義的な植民地支配に対抗するため、イスラーム諸国の連帯と伝統的なイスラームの革新を唱えた。前者を汎イスラーム主義、後者をイスラーム改革主義という。この二大思潮は現代のイスラーム復興運動に引き継がれ、発展を遂げてきた。そのため、彼